

つあるというのも皮肉である。送られてきた報告書をめぐりながら、北京市内のレストランで、是非とも広島を

訪れたいと語った Robock 氏のことが思い出された。

渡辺光先生の思い出

栗原尚子

渡辺先生が御逝去なされてから約9カ月、その御生前の幅広い御活躍ぶりを震づけるように先生の思い出を多くの方々がすでに御書きになっている。そのような方々の文章には及びもつかないが、先生の講義を4年間聞いた1人としてその思い出を綴ってみたいと思う。長い年月がすぎ去った後、教師と学生との関係で心に強く残っていることという、講義の内容そのものよりも、そのあい間でのかわした一言、二言が印象に残っていることが多い。その点からいうと、私の場合は、講義の折々に、「君は1番で入学したのだね。すごいね——」とニヤードとされることであった。一番の内容が問題である。

こう書くとう入学試験の結果が一番なのかと大方思われることだろうが、残念ながら全くそうではなく、真相は受験番号の一番である。4年間、講義という一番前の席を陣とっていたため、講義の最中でも教壇からおりられ、顔をしげしげとのぞき込まれたこととともによく覚えている。自分が教壇に立つ番になってみて、いつも方向違いの方をみながら一方的に話しを進めていることを考えると（その上、話すのが早すぎるというマイナスまで加わり）、学生の顔をみながら講義をするのが以外とむずかしいことを実感している。誰でも覚えているのが、ハック耕で、こうやってするのだという棒をもって教室をかけまわられたことなど、先生は、学生の講義への関心を常にいろいろな形で呼び起こしていられたと思う。

大学を卒業してから、法政大学の大学院で御顔をみか

けることはあったが、講義には出席できなかった。その後、地理思想史の研究会で御一語する機会があり、その御元気な御様子に驚いたものであった。我々の当時の研究会は、研究報告が夜の11時頃終ると、その後もう一ラウンドあり、アルコールも加わりながら、堅い研究会の余白を埋める話しがとびかい、午前1時すぎになるのが普通であった。この折でも、先生はできるだけおつきあい下さり、いろいろ話しを聞かせて下さったのである。研究会メンバーの関心は、日本の地理学界の中でも、早い時期にアメリカで御研究なさった先生からみた、当時のアメリカ地理学界の状況であり、そしてその日本の地理学界への受容に関してであった。そして誰もが驚嘆したのが、その記憶力のすごさであった。

日本における近代地理学の形成において先生の果された役割あるいは先生がかかわっていらした時期の地理学をどのように考えていらしたか、御聞きしなければならぬことを沢山残したまま、早くも私達の目の前からさらされたことが本当に残念に思われる。あまりにも御元気でいらしたため、こんなに突然とは想像しなかったのである。

昨年秋から、先生の御著書を整理させていただく機会があり、仲々見つからないという本を頼まれて、それを多くの著書の中から見出し出したとき、国際的に御活躍されたその幅の広さを実感したものである。心から御冥福を御祈りいたします。

リモートセンシング解析技術者研修に参加して

渡辺真紀子

幸運にも、科学技術庁主催のリモートセンシング技術者研修に参加することができた。期間は10月18日から11月10日までの延べ13日間、受講者は22名で国公立の大学や研究機関において現在あるいは将来的にリモートセンシングにかかわる研究、業務に携わる人を対象としたもので、59年度で7回目になる。前半の6日間は、東海大学附属望星高校（都内・渋谷区）を会場に、主にリモ-

ートセンシングの原理・応用分野に関する講義が行われ、その合間に、東海大学情報技術センターと埼玉県鳩山町の宇宙開発事業団地上観測センターを見学した。地上観測センターでは、1986年に打上げが予定されている日本の海洋観測衛星 MOS-1 の受信局の建設が着々と進められていたが、現在受信中のランドサットデータも含めて、今後データの保存がどのようになされるのが、気